

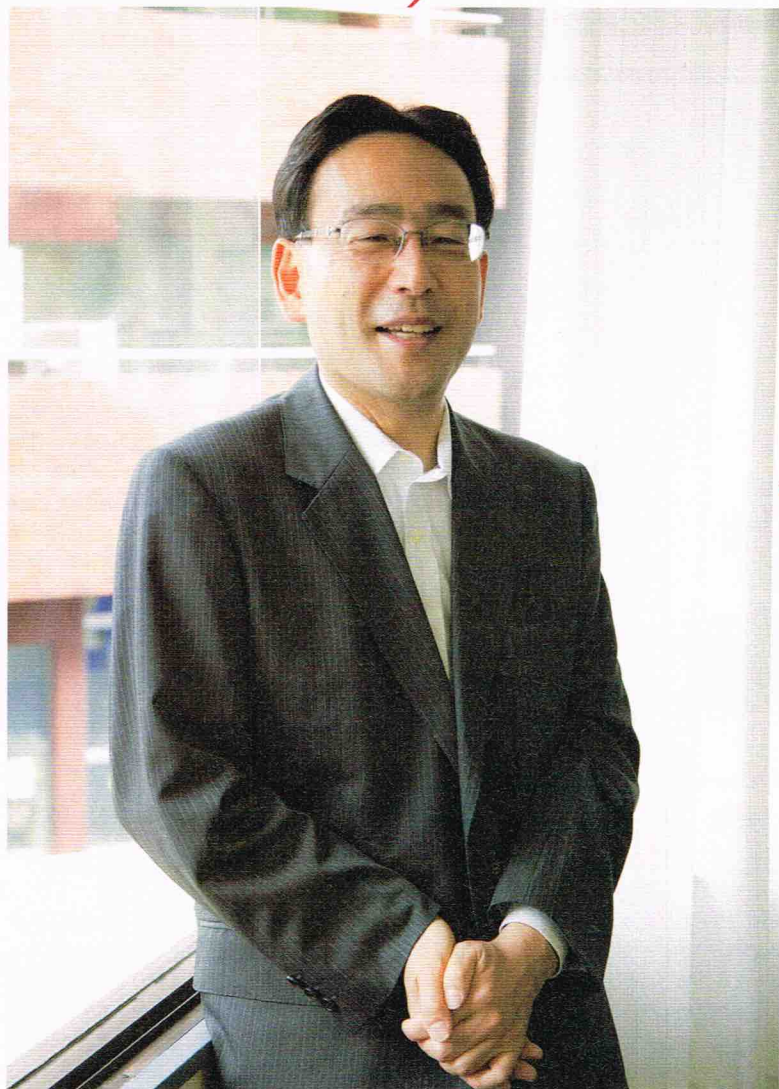
地域エコノミスト

藻谷浩介^{さん}

Motani Kousuke

藻谷さん、アジる
「田舎へ行って
しがらめ！」

文：佐藤恵菜 写真：山本大樹



「TURNS」読者にとって、『里山資本主義』（角川書店）は心強い参考書だ。

人が昔から手を加えながら共生してきた「里山」。森や川や田畑など、もともと自然にあるものを使いながら暮らす。それは里山の活性化にとどまらず、日本経済の再生、失われしコミュニティの復活につながるということを、実例をもって提言している。

里山資本主義とは、「お金が乏しくなっても水と食料と燃料が手に入り続ける仕組み、いわば安心安全のネットワークを、予（あ）め用意しておこうという実践」だと、藻谷さんは説く。いわばマネー資本主義のカウンターの考え方だ。

前著『デフレの正体』（角川書店）が有名すぎて、藻谷さんを経済学者か経済評論家と思っている人もいるかもしれないが、本業は地域再生コンサルタント。瀬戸内海を見下ろす山口県の町で育ち、釣り好きな少年だった。さらには自ら「日本の地理にいちばん詳しいのは私」、つまり、歩く地理事典だという。里山が本来持っている資産については、以前から注目してきた。その里山の資産のすばらしさについては、藻谷さんの著書をお読みいただきたい。ここでは、藻谷さんが『里山資本主義』に込めた

思いをうかがった。

自給できない都市の 頼りなさを知った3・11

お金がなくても水と食料と燃料が確保できる「安心安全のネットワーク」は都市部では高額の花だ。町暮らしをしているとあまり意識しないが……。

「根底にある不安を見て見ぬふりをしている人が増えていきますね」

グサッ。いきなり心をえぐられるような言葉を繰り出す藻谷さん。「3・11で、都市の災害に対する脆弱性が明らかになりました。水も食料も店頭から消え、計画停電にあわてました。地震ひとつで、食べるものも飲む水も確保できなくなる、そんな不安定な場所に生きていることを、東京に住む人は思い知らされたと思います。」

もっとも、そういう不安は3・11以前からも潜在的にありつづけてきたものです。それが3・11で顕在化したまで。今年も都市洪水になりかねない大雨が何度も降り、いつ洪水で流されるかわからない。都市で生きるとは、常にこうした原始的ともいえる不安を抱えて生きるということです。少子化が問題になっていますが、こういう不安定な場所で、人は子どもを生み育てたいとは思えない

2013.12 佐藤 恵菜

のではないのでしょうか」

老後のリスクを減らすと 子どもがほしくなる

前著『デフレの正体』で藻谷さんは、日本のデフレの真の原因は不景気ではなく、生産年齢人口の減少にあると説いた。少子高齢化により、15〜64歳というモノやサービスを生産し、かつさかんに消費する年齢層が1996年を境に減少に転じていることに着眼。日本の将来について語るとき、少子化の問題は避けて通れないという。

「出生率の低い地域と高い地域の違いはなにかわかりますか？たとえば札幌と東京の出生率は低い。秋田も低いのに、隣の山形はそれほどでもない。一方、沖縄は高い。じつは出生率の傾向は、収入や失業率などの統計的数字では説明できません。私は日本中を歩きまわっている中で、これらの地域から肌で感じるものがありました。この違いはひとことで言えば、絶望度の差なのだと思います」

絶望度とは？

「いまは出生率が低いだけでなく、結婚しない人も増えていきますよね。若いうちは気楽でいいと思うのですが、年をとって身寄りもなくなったら、どうでしょうか。介護や看病はお金で解決できるかもしれ

ませんが、非常にさびしいと思うのです。いま、都市部で暮らしている人のなかには、そうしたさびしい老後を迎えるリスクを負っている人が少なくない。けれども、そのリスクを負っていることを多くの人が認識していません」

藻谷さんが心配しているのは、この点である。では、なぜ多くの都市生活者（おもに子どもを持たない可能性が高い人）は、老後のリスクを認識しないのだろうか？「余裕がないのでしょう。目の前のことで精一杯なのです。今日の仕事、あるいは今日を楽しむことで、先のことを考える余裕がない。将来は不安だけれど、不安すぎて、見て見ぬふりをせざるをえない。それを私は絶望と呼んでいます。そういう人たちが、子どもを残そうと思えるのでしょうか？」

なにやらイソップの『アリとキリギリス』の寓話を思い出させる。絶望しているつもりはないけれど、言われてみればそうかも……と感じる人も少なくないのではないかと。「社会的不安ももちろん大きいですが、いつ地震がくるかわからないとか、日本経済はダメだとか。じつは日本の経済はぜんぜん悪くないのですが、私が『ダメじゃない』と何千回も講演してわかったことは、何千回言っても効果がな

いということでした。『日本経済はダメ』という不安がないと不安みたくない。そんな得体の知れない不安感を、肩のコリをほぐすように引きはがしたいという思いで、私は『里山資本主義』を書きました」

田舎と東京、もつと自由に入出入りしよう

藻谷さんが『里山資本主義』を読んでほしいと思う筆頭のターゲットは、東京に住む、東京しか知らない人たちだという。なかでもフリーターや「ブー太郎」たち。

「同じブーなら、都会のブーより田舎のブーのほうがだんぜんいい。同じコンビニのアルバイトなら、都会のコンビニより田舎のコンビニで働いたほうがいいんです。時給は低くなりますが、生活費が、とくに家賃が圧倒的に安いですから、可処分所得はむしろ増えるかもしれない。さらに空いた時間に近所の畑で、チョボチョボと野菜をつくることもできる。少しずつ食料自給ができて、食べていけるようになるんですよ」

メディア（『TURNS』も含む）には、いまの職を生かした半農半Xで田舎暮らしを実践している人たちがたくさん登場するわけだが、現実を見わたせば、手に職のない人も多い。

「半農半Xは理想でしょう。でも、そんなエグゼクティブじゃないやり方でいいと思うんです。もつと気楽に田舎に行って、住んでみればいいですよ。それでダメだったら、また東京に戻ってくればいい。そしてまた別の田舎へ行ってみる。田舎と東京、もつと自由に出入りしたらいいんです。どこに行っても同じ日本です。世界から見ればアジアの片隅ですよ！」

そんなに気ばるほどのことではないよと、藻谷さんはフリーターの背中を力強く押している。

「思うに、結婚しない人たちがたくさん考えすぎなんじゃないでしょうか。田舎に行つて、一緒に暮らして、子どもができたから結婚しようよ、でいいと私は思います。これ、ふまじめな話じゃないですよ。まじめに考えすぎて結婚に踏み切れない人が多すぎるんです。そんなキチツと考えなくても、安心して暮らせる社会にしくちやいけないのです」

人生はしがらみが 多いほど豊かになる

とはいっても、田舎はしがらみがあつて面倒だ……。

「子どもがいない、結婚しない30代、40代が増えています。年をとって身よりもないときに、あなた

の面倒を見てくれるのはだれか？

しがらみのある人だけです。

病院に入院しても、治れば出ていかなきゃいけないですよ。私は田舎でも都会でも、いろいろな人と「しがらみ」ながら生きるほうが、人生は豊かで楽しいと思います。もちろん、人権侵害みたいなのはよくありません。でも若い人たちは、新しいシガラミをつくっていくのではないのでしょうか」

コミュニティ、ネットワーク、絆。いろいろな言い方があるが、そのどれにも濃い人間関係はある。しがらみとは里山資本主義がもてる「安心安全のネットワーク」のひとつの柱なのではないか。

「しがらめ！」

豊かな人生を考える人へ、藻谷さんからのメッセージである。



『里山資本主義』
藻谷浩介、NHK広島取材班／
角川書店／820円
木くずでエネルギー自給する
など、里山だからこそできる安
心感のある暮らしのすすめ。

PROFILE

もたに・こうすけ

1964年、山口県出身。東京大学法学部卒。現在、日本総合研究所調査部主席研究員。日本全国くまなく歩き、現場での取材、統計的な数値、郷土史などを踏まえた地域振興の提言を続けている。『デフレの正体』（角川書店、2010年）も話題に。

映画監督

矢口史靖

Yaguchi Shinobu

明治維新を経た
“相手”と仕事する
林業家つて、すごい！

文：佐藤直樹 写真：寺島由佳 (G.O.)
SNO-4 WOOD JOB「林業家な田舎」製作委員会 (G.I.)

シンクロナイズドスライミングに
血道をあげる男子高校生（『ウォー
ターボーイズ』）、ビッグバンドジ
ヤズに夢中になる田舎の女子高校
生（『スウィングガールズ』）。ちょ
っとマイナーな人々を愛情たっ
ぷりに描いてきた矢口史靖監督が、
次に目をつけたのは、林業する人
たちであった。

『WOOD JOB!（ウッジョ
ブ）〜神去なあなあ日常〜』は青
春林業エンタテインメント。矢口

作品の主人公は、ひよんなコトか
らとんでもない展開にまきこまれ
ることが多いが、今回の主人公・
勇気（男子高校生）の場合、一枚
のチラシが人生を変えた。表紙の
「林業女子」に魅せられ、林業研修
プログラムの研修生として、三重
県の山奥、神去村へと向かう。駅
に降りたとき、ケータイは途切れ、
マムシに迎えられる。生まれては
じめて見る山奥の田舎、獣が出る
山の道、近寄りたがたい山の男たち。
コンビニもカラオケもない暮らし
が待っていた。

林業は木こりの 世界だと思っていた

原作は三浦しをんの『神去なあ
なあ日常』。ずっとオリジナル作品
をつくってきた矢口監督が原作も
のを映画化したのははじめてだ。

「林業の描写のおもしろさに魅せ
られました。想像を絶する世界な
ので、リアルに映像化したらもっ
とおもしろくなると思って」

矢口監督は林業はもろろん、ス
ギとヒノキの見分け方も知らなか
った。シナリオを書くために現地
を訪れるまで、頭の中には「与作」
の歌が流れていたという。コンコ
ンコン、コンコンコン。

「違っただですよ。チェーンソー
くらいは知っていたけれど。これ

ほど機械化されていたとは」

勇気が参加した研修プログラムの
期間は1年。林業の担い手を育
てるため、現実にこうしたプログ
ラムは各地で実施されている。林
業者としての基礎知識、斧の使い
方、縄の結び方などをひととおり
学ぶ。その後、プロの林業家に世
話してもらいながら仕事をする。

都会っ子の勇気は、田舎の暮らし
にも、地を這うような過酷な労働
にもなじまず、何度も脱走を試み
るが、そのたびに失敗してしまう。

「勇気の立場に自分を置いて想像
してみると、やっぱり僕も脱走し
ただろうなと思います」

2か月間、撮影で山にこもった。
これまで経験したことのない過酷
な撮影だった。東京に戻って、ホ
ッとしたという。矢口監督は田舎
暮らしをしたことがない。ただ、
九州にある妻の実家に行くと、田
舎暮らしも悪くないと思うそうだ。
「いい所なんです。自然も豊かで、
近所の人々が玄関に野菜をどさっ
と置いていくくれる。お金がなく
ても豊かな暮らしができそうです」
しかし、最寄りの映画館まで車
で1時間以上かかるのがネックだ。
「自然が豊かでいいなあとか、田
舎の人は親切でいいなあとか、ど
んなに気に入っても、僕は映画館
のない田舎には住めないですよ。

だから神去村にも住めない。

都会人が田舎暮らしにここが
を。森が好きで、林業が好き
で、村の人に受け入れられて—
だとしても、神去村のような村に
ずっと住めるかといったら、やっ
ぱり簡単ではないと思います。

ただ、映画のように濃ゆい一
年を過ごしたら、なにかが変わる
のかもしれない、と思いました。
一年働けば、ここにいて意味が見
つけられるかもしれない。勇気み
たいな優秀な男でも、できた
んですから」

(なにができたのかは、ネタバレ
になるので、「なあなあ」に)

「だから、そのきつかけはなんだ
っていいと思うんですよ。勇気の
ように、かわいい女の子に会いた
くて、でもいいと思うんですよ」

明治維新、大正デモクラシー を経てきた仕事相手

おそらくふつうの人は見たこと
がない大木。幹に斧で伐り込みを
入れ、チェーンソーがうなり、地
響きとともに倒れる。林業のダイ
ナミズム、厳しさ、魅力が画面い
っぱいに伝わってくる。

「いい丸太は一本数十万円にもな
る。でも自分が伐って売ったその
木は、自分が育てた木ではない。
父の代、祖父の代、その前の代が

植えて育てて手入れしてきたもの
です。そして、いま自分が下草を
刈って、植林して枝打ちして育て
ている木は、自分たちの役に立つ
わけではない。100年、200
年たつて、ようやく役に立つ木に
なる。自分たちの子孫が評価して
売って、それで彼らの生活が成り
立っていくわけですよ。仕事と
資産が子どもに引き継がれていく。
これは親からすると、とてつもの
喜びだと思います。そして子ど
もは太い幹にチェーンソーを入れ
るとき、この木は親父やおじい
ちやんが育てた木なのだと思えば、
胸がいっぱいになると思う。

もうひとつ、林業の魅力は、木
の成長が見られること。毎年少し
ずつその姿を変えていく。森に入
ると、年ごとにめぐる四季のサイ

クルを感じつつ、5年前に植えた
木が成長しているのがわかる。時
計やカレンダーがなくても、時間
の流れがわかる仕事なんですよ」

矢口さんは撮影の合間に切り株
の年輪を数えてみたことがある。
……100……200……。江戸
時代から生きていて、明治維新も
大正デモクラシーも戦争の時代も
生き抜いて——と思うと、ふつ
つと畏敬の念がわいてきた。

「歴史を経てきた木なんだと思っ
と、簡単に踏みんだり蹴ったりで
きません。林業ってすごい相手と
仕事しているんだなあと思います」

山で働く人たちは、山に入る前
に手を合わせて頭をたれる。大き
な木を伐るときは、木を酒で清め
てから斧を入れる。山には神様が
いるからである。



スタッフもキャストも体を張った撮影が続いた。

克蘭クインの前に 神社でお祓い

上空をロケットみたいなのが
かすめていった——撮影現場にな
った山では、そんな不思議な話を
たびたび聞くそう。

「僕自身は撮影中に山に神様が
いると感じた瞬間はありませんが、
例えば、映画の世界にもそれに近
いものがあるんですよ」

克蘭クインの前に関係者一同、
神社に行ってお祓いをする。

「単なるゲンかつぎだと思ってい
ましたが……今回の撮影は、スタ
ントなしで俳優を高い木に登らせ
たり、チェーンソーで伐倒したり、
危険度が高いので……。幸い、ひ
とりも怪我せずにすんだのは、や
はりご利益なのかも」

沢の近くで主人公の勇気と「林
業女子」が座るシーンがある。撮
影前、矢口監督はふたりの近くに
あった石をころんと転がした。マ
ムシが2匹、出てきた。

「ええ、静かにどいていただきま
した。山の神様は蛇だと聞いてい
たので。無事に撮影を終えられた
のは、つがいの神様に護ってもら
えたからかもしれません」

まだ公開前なのに、この映画に
はつづきがあると監督はいう。
「映画が公開されたら、ロケ地に



主演の染谷将太さん(左)と長澤まさみさん(右)。

なつた村を訪れる人が増えるでし
よう。そのなかから村に——タ
ーンする人が出てくるかもしれない。
村に定住して、家庭をもつて子ど
もができて。いろんなことが活性
化する可能性があると思う。わが
村に観光客なんて……と言ってい
たお年寄りも、生命力の塊(かたまり)な
な子どもを抱いたら、きつと元気
になっちゃうと思うんですよ」
そうなつたら、ウツジョブ!



『WOOD JOB!』

原作：三浦しをん『神去な
なあ日常』(徳間書店刊)。監
督・脚本：矢口史靖。出演：
染谷将太、長澤まさみ、伊藤
英明 ほか。5月10日ロードシ
ョー。公式サイト：woodjob.jp

PROFILE

やぐち・しのぶ

1967年神奈川県出身。1990年
に、ぴあフィルムフェスティバ
ルで8ミリ長編『雨女』がグラ
ンプリを受賞。16ミリ長編『裸
足のピクニック』(1993年)で
デビュー。2001年公開の『ウ
ォーターボーイズ』で話題を
呼ぶ。その後『スウィングガ
ールズ』、『ハッピーフライト』、『ロ
ボジー』を監督。

スペシャル
インタビュー

地方創生担当大臣

石破茂さん

いつの時代も、 地方を変える人が 日本を変えるのです

この秋、安倍内閣がスタートさせた「地方創生」のリーダー、石破茂さん。防衛に詳しいというイメージが強いけれど、じつは農林水産畑のキャリアも長い。日本一人口の少ない鳥取県出身で、地方再生にかける思いはひとときわ強い。そんな石破大臣が、地方の可能性を語る。

文：佐藤恵菜 写真：阪部希代野



——はじめに、石破さんが感じる地方の魅力とはなんでしょう？

石破 ひとりひとりの存在感が大きいことだろうね。東京にいても何百万人のなかのひとりだし、う？ でも地方に行くと、何千人何百人のなかのひとりになる。自分の存在というものを強く認識できる。自分はここでのんのために生きているのか、人のどんな役に立っているのか、あるいは人からどう助けられているのか、リアルに感じられる。

東京ではまわりだけがどんどん動いて、自分はその他大勢の傍観者であることも多いけれど、地方では傍観者ではられない。

私もいまは政府の仕事をしているが、地元に戻ると、自分の仕事がかとうか、リアルに感じる事ができます。

「ふるさと」という歌をご存知ですか。

♪ 兔追いし彼の山々、小鮒釣りし彼の川々。この歌詞に、「志を果たして いつの日にか帰らん」とあります。東京に出て、志を果たして故郷に帰るという話ですね。けれどこれからは、志を果たした地方に行く。あの歌が親しまれた時代と逆のことが始まるんだろうと思います。

どこかしこも 時代に合わないミニ東京

——地方再生は40年前から日本の課題でした。1970年代には田中角栄内閣の「日本列島改造論」、大平正芳内閣の「田園都市構想」、80年代には竹下登内閣の「ふるさと創生」という地方振興策がありました。今回の「地方創生」はなにが違うのでしょうか？

石破 「国土の均衡ある発展」は、自民党のキャッチフレーズみたいなものでした。国民に不公平があつてはならん、地方も都市の利便性を享受するべきであるという哲学に沿って列島改造論はあつた。70年代後半には、都市に田園の潤いを、田園に都市のにぎわいをと、田園都市構想に変わっていった。少しずつ変貌しながら、でも基本的には東京と同じようにという流れが続いてきた。

いま、「国土の均衡ある発展」は、ある程度達成されたのだと思います。日本国中に高速道路が通り、飛行機が飛び、あるいは新幹線が走る。国内で日帰りできない場所を探すのがむずかしいくらい交通網は発達した。

ところが時代は変わった。どこもかしこもミニ東京のような、同じような町になった結果、どこも

かしこも時代に合わなくなった。

高度成長期以降、地方から東京へ人がなだれ込みました。恐ろしい勢いで地方の人口が減り、しかも東京は日本でいちばん合計特殊出生率が低い。時間差はあるけれども地方も東京も人口減少が進むということは、結局は国家の衰退につながるでしょう。

いま、この流れを止めなくては。その危機感日本列島改造論のころとは比較にならないほど大きい。今回の「地方創生」は、日本をつくりかえるという意識で取り組まなくてはならないものです。

これまでの地方再生は東京目線で、地方は大変だね、なんとかしてあげなきゃという、ある種、あたたかいまなざしで語られてきた。そういう時代は終わりました。

21世紀の日本は地方がつくっていくことになるでしょう。いつだって地方から国は変わっていった。明治維新もそうだ。地方を変える人が、日本を変えるのです。

ここにしかないものがあれば、必ず若い人が集まる

——ターン、Uターン希望者のもっとも気になるのが仕事です。地域経済の可能性を、どのように見えていますか？

石破 全国の市町村をまわると、

藻谷浩介さんのいう「里山資本主義」も含めて、地域内でまわる経済の仕組みをつくりはじめている町や村は、すでにけっこうある。すごいなと思う地域は、必ずしも交通至便な所ではないのです。

たとえば、北海道の音威子府村。北海道一人口の少ない村だが、村立の高校がある。それも美術工芸の高校で、アートを使ったまちづくりをしている。こんなことを教える学校はほかにないから、よそからも生徒が来る。すると雇用が生まれる。東京から日帰りをするのがむずかしい村で、いまや5人にひとり学校関係者です。

そして、島根県の邑南町。平成の大合併で生まれた町で、その後も人口減少は止まらない。けれどもここは「B級グルメはやらないぞ」と決め、地元の石見和牛などの特産を使ったA級グルメで人を呼んでいる。また、子どもの医療費や保育料を無料にする基金を積み立て、若者を呼ぼうとしている。

岡山県真庭市では、地元の木材を使ってエネルギーまで地産地消をめざしている。地方に必要なものは、そこにしかないもの。なんです。東京で手に入るものじゃない。そこにしかないものを求めて人は集まります。そこには必ず若い人が来る。

事実、成功している地域を見ると、若い人が中心になっている所が多い。加えてアドバイスをしてくれる地元の長老的な存在がある。昔から「よそ者、若者、ばか者が地域を変える」と言われたが、ほんとうにそうなんです。

地方経済の可能性について言えば、これらの地域は20世紀型の経済システムとは違った発想で動き出している。食べ物やエネルギーを地産地消にして、地域でお金をまわすことで、お金でなんでも買えるという発想に立たない。

日本は食料もエネルギーも多くを海外に依存し、円高だ、円安だと、外的要因によって大きな影響を受けています。そういう日本から脱していく、その先端を行くのは地方なのではないでしょうか。

TURNS読者へ「次はあなたの番！」

——TURNSの読者は移住を考えています。ターン、Uターン希望者に、どんな支援策が考えられますか？

石破 TURNSには「次はあなたの番(TURNS)」というメッセージも込められているのかな？

地方創生は、まさにターン、Uターン者の出番ですよ。地方で仕事をしたい人たち、あるいは地

域おこし協力隊のような人たち、地方を本気でサポートするのだという人たちに対して、国は考えられる限りの支援をしていきたい。

ただ、「気をつけよう甘い言葉と暗い道」(笑)で、300万円と豊かな生活とか、子育て支援が充実しますとか、バラ色の話ばかりするつもりはありません。移住希望者には、自分はそのために必要な情報が必要だろ

うし、国はそのために必要な情報発信をするということです。

たとえば移住先を調べるのに、いまは自治体ひとつひとつに問い合わせをして大変でしょう？ 移住の目的、望む年収、家族形態などの項目を入力すると、ふさわしい移住候補地がババツと出てくる。グルメ情報検索サイトみたいなサービスがあったらいいですよ。

移住支援策が具体的に動きだすまでにしばらくかかるでしょう。でも、待っていてください。あなたの番は必ず来ます。

——石破さんが歌った「ふるさと」を作曲したのは、鳥取県出身の岡野真一である。金沢出身の室生犀星は「ふるさと」は遠くにありて思ふもの」と詩に書いた。ふるとは近くにあること。TURNも地方創生策に注目していきたい。

「地方創生」って、なにをするの？

人口急減・超高齢化の課題を前に、各地域がそれぞれの特徴を生かして、自律的に持続可能な社会の創生をめざす。長期ビジョンの趣旨は、「50年後に1億人程度の人口を維持することを目指す、日本の人口動向を分析し、将来展望を示す」。

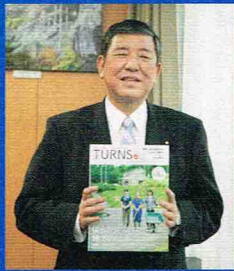
「総合戦略」(骨子)の基本的視点より抜粋

●まち・ひと・しごと創生と好循環を確立する ①しごとの創生 若い世代が安心して働けるよう「相応の賃金」と「安定した雇用形態」と「やりがいのあるしごと」を満たす「雇用の質」を重視した取組が重要。②ひとの創生 地方での就労や人材の確保育成、地方への移住・定住を促進。若い世代が安心して働き、希望通り結婚し、出産・子育てできるよう切れ目のない支援を実現。③まちの創生 中山間地域等において心豊かに生活できる環境の確保。地方都市の連携の促進と大都市圏等における高齢化・単身化の問題など、地域課題の解決に取組む。

PROFILE

いしばしげる

1957年、鳥取県八頭郡出身。慶應義塾大学法学部卒業。1986年、29歳で衆議院議員初当選。2002年に防衛庁長官(小泉内閣)、2007年に防衛大臣(福田内閣)、2008年に農林水産大臣(麻生内閣)。2014年9月から地方創生担当大臣。



観光カリスマ、「JTIC.SWISS」代表

山田桂一郎

Keiichiro Yamada

地域の将来を真剣に考え、
行動できる人が
“地元民”になれる

文・佐藤恵菜



元セーリング選手。現在は、スイ
スでスキーのインストラクター、ま
たプロのガイドとして山々を歩く。
“観光業のプロ”そして、観光マー
ケティングと地域経営のコンサルタ
ントとして山田桂一郎さんは日本各
地を飛びまわる。内閣府や国土交
通省、農林水産省が認定する“観
光カリスマ”のひとりでもある。

然を楽しみながら人生を謳歌する
人々に出会った。必ずしもGDPが
突出しているわけではないオースト
リアで、山田さんは真に豊かな暮
らしとは何かを考えはじめた。当
時、日本はバブルの真つ最中だった。
やがて山田さんは世界を旅する。
たどり着いたのは、アルプスの山々
に囲まれたスイスのツエルマットだ。
世界の名峰マッターホルンを見上げ
るこの小さな町には、ガソリン車は
見あたらず、電気自動車と馬車が
走っていた。

数日のツエルマット滞在が山田さ
んの人生を変える。旅を終えたあ
と再びツエルマットへ向かい、観光
局のインフォメーション業務を行う
とともにガイドとして働きはじめた。

**地元への愛着と誇りが
豊かな町をつくる**

ツエルマットはホテルやレストラ
ンの観光業をおもな生業としている
が、農業などとの連携で地域の総
合産業化に成功している。人口58
00人ほどの町はおだやかで豊かだ。
「この地が成功しているのはマッタ
ーホルンという風光明媚な観光資源
があるから、だけではないんです」
と、山田さんは言う。

町にガソリン車の乗り入れを禁じ
たのは住民自身だった。生活環境を

守るための自主ルールである。自
ら景観の保全にとどまらず、ツエ
ルマットの住民は、教育や社会福祉
発案所のあり方にも自主ルールを
くり、行政と連携し、町づくりを
取り組んでいた。さらに感銘を受
たのは、それが基本的に観光客
誘致策ではない、と知ったからだ。
「彼らは自分たちの暮らしの質
高めるためにそうしているのです」
建造物の色や車を規制するのも
観光のためというよりは、町のた
暮らしやすい町にして、次世代へへ
き継ごうとしているのです。それ
け住民の町への愛着は深い」

山田さんが旅行者として初め
ツエルマットへ来たとき、町の人に
眺めが素晴らしいと言うと、「そ
だろう！ こっちにもいい所があ
よ」とさらに案内された。レスト
ンで料理がおいしいと言うと、「こ
うでしょう！ 私がつくったんだ
ら」とシェフは胸を張った。

「町に誇りがあるから、もつとい
町にしようと思うんです。すると
どんどん快適になり、ライフスタ
ルの質が上がる。どんどん素敵な
になるからさらに観光客が集まる
遊びにくるだけでなく、住んでみ
い町になるんですよ」

ただ風光明媚だけではない。
地元の人がその自然と風土を大
にし、愛着と誇りをもって町づく

岡田武史

みんなが集まつて
お祭り騒ぎできる場所は？
昔、神社仏閣、いまスタジアム

文..佐藤恵菜 写真..服部希代野

るんです。型を破ることから自由なプレイが生まれてくる。ところが日本には型がない。Ｊリーグが生まれて20年、日本の指導法は“監督の言うとおりに動け”から“自分で考えて自由にやれ”に変わっていきました。けれども自由から自由は生まれませんですよ」

サッカーの型をつくりたい。それも十代の育成チームからトップのプロチームまで同じサッカー哲学、同じプレイスタイルを貫いて、

FC今治は四国リーグで優勝争いに絡む常連だが、昨年は3位に終わった。岡田さんの目標は、来年は四国リーグで優勝してJFL（日本フットボールリーグ）に昇格し、その2年後にJ3に昇格。10年後にはJ1で優勝と大きい。だが、それだけではない。

「オーナーになって、今治でやるぞ」と腹を据えたら“妄想”が次々とわいてきた」と岡田さん。

「FC今治だけ強くなってもおもしろくないじゃない? 地元の少年団や中学校、高校のサッカー部もいっしょに強くなりたい。今治全体でひとつのピラミッドをつく

り、その頂点のFC今治が強く、な
っておもしろいサッカーをすれば
全国から、うちの育成チームに入
りたい子どもや指導者が集まっ
て来る。アジアからも来るでしょう。
日本のサッカーはリスペクトされ
ていますから。僕の頭の中では、
サポーターもスポンサーもボーダ

アジアからサッカー人が
集まる今治に

愛媛県今治市は瀬戸内海を望む人口17万人の小都市だ。古くから造船の町として世界的に知られ、

の「岡田メソッド」を構築します。僕はそれをほかのチームにも公開していくつもりです。岡田メソッドを看板に新しいビジネスモデルをつくり、四国リーグのクラブチームに人材と資金を呼び込みたい」

新しいビジネスモデルで地球を救う

クラブチームの夢を語る岡田さんだが、今治に来る前は、胸中にある葛藤を抱えていた。

じつは、名将岡田武史にはサッカー指導者のほかにエコロジストの顔がある。少年時代はボーイスカウトで活動するなど大の自然好き。北海道富良野の自然塾を今治に開くなど、子どもたちの環境教育にも力を入れている。早稲田大学在学中にローマクラブ*の『成長の限界』を読んだのをきっかけに、環境問題に関心を寄せてきた。大量生産・大量消費型の経済、生活、それを加速させるグローバルバブルに対する疑問を抱いた。90年代、Jリーグ設立に参画したのも、もとはといえば、大量消費型の生活を変えたいという思いがあったからだという。

「週末、旅行に行くとか、ゲームセンターで遊ぶのもいいけれど、おらが町のスタジアムでサッカー

を観戦して、遊んで、ビール一杯飲んで帰るほうが大量消費しないし、豊かなんじゃないかとね。Jリーグはライフスタイルを変える拠点になると思ったんですよ」

Jリーグの理念のひとつは「地域社会と一体となったクラブづくり」。サッカーを中心とした地域のスポーツ振興だ。しかしJリーグが発足して今年で23年。大手スポンサーのついているクラブを除き、地方のクラブ経営は苦戦を強いられている。

「地方が少子高齢化、グローバルバブルによる一極集中化という負のスパイラルに入っていくなかで、クラブチームに資金を出せる会社は、そうはない。ではどうするか。外から人とお金が入ってくるビジネスモデルを考えるしかない。そこで悩みましたね。外から資金を集めるということは、その分、よそがマイナスになるということですから。その意味で、この仕事は自分の生き方と矛盾するんじゃないかと逡巡しました」

岡田さん自身は消費ダウンサイジングを志向し、田舎暮らしに憧れる「TURNS人」である。

「でもね、地方がダウンサイジングしたら、消えてなくなってしまうかもしれない。これは地方の生存競争なんだと気づいたんですよ。

生存競争には絶対に勝たなくてはいけない。負けたら消えてしまうんですから。そう考えることでオーナーの仕事が始めることができました。でも生存競争に勝ち残れたとしても、さらに勢力を広げていくようなことはせず、「足るを知る」ことが大事です。そういう競争の仕方を、僕たちはこれから学ばなくてはいけないと思う」

子どもたちに、少しでもよい社会を残すために

岡田さんがFC今治のオーナーに就任して数か月。この地にサッカー人が集まりはじめた。たとえばJチームで実績のあるコーチやトレーナーが「岡田メソッドに参加したい」とやってくる。あるいは外資系企業のビジネスマンが「フロントで働きたい」と岡田さんを訪ねてくる。

集まってくるのはサッカー人だけではない。「岡田メソッド」に期待する企業人が国内から、お隣の中国からもやってくる。小さなクラブの、いったい何がこれほど人を惹きつけるのだろうか？

「僕ひとりの力じゃないですよ。おそらく、チームを一からつくりあげていくことに魅力を感じるんじゃないかな。一から始めるのは

とんでもなく大変なことだけど。もうひとつ言えることがあります。みんな感じているんですよ、行きづまりを。僕らは70年間、戦争のない、高度成長という恵まれた時代を生きてきた。それがいま1兆円の財政赤字、環境破壊、他国との緊張……。こんなものを子どもたちの代に残していいのか、と。僕は地球環境を救おうとか大それたことは考えていない。ただ親として、子どもたちの代に少しでもよい社会を残したいだけです。

僕に共感して集まってくれる人たちに、その思いがあるんじゃないかな。次世代のために何かしたいと。もしかしらば贖罪の意識に近いのかもしれない」

そんな責任感も秘めた「岡田メソッド」が、地域の人を巻き込む可能性もある。たとえば育成チームに全国から高校生が集まってきたら、彼らのための寮をつくる。

「そこで地域のおじいちゃん、おばあちゃんに食事をつくってもらってもいいよね。スポーツマンのための栄養学講座を開いたり。アジアからも選手が来るから英会話教室があってもいいね。FC今治が盛り上がり、シャッター街がよみがえる可能性もある。気がつけば人口17万人の今治が、妙にコスモポリタンで活気づいている、

そんなイメージがわいてきます」もうひとつ、大きな目標がある。「8年後、集客数2万人のスタジアムをつくる」こと。

ホテルやレストラン、娯楽施設などを含めた複合型スタジアムにしたいという。都市部では町中に広大な土地は確保できないため郊外のスタジアムが多いが、今治には町中に十分広い土地がある。

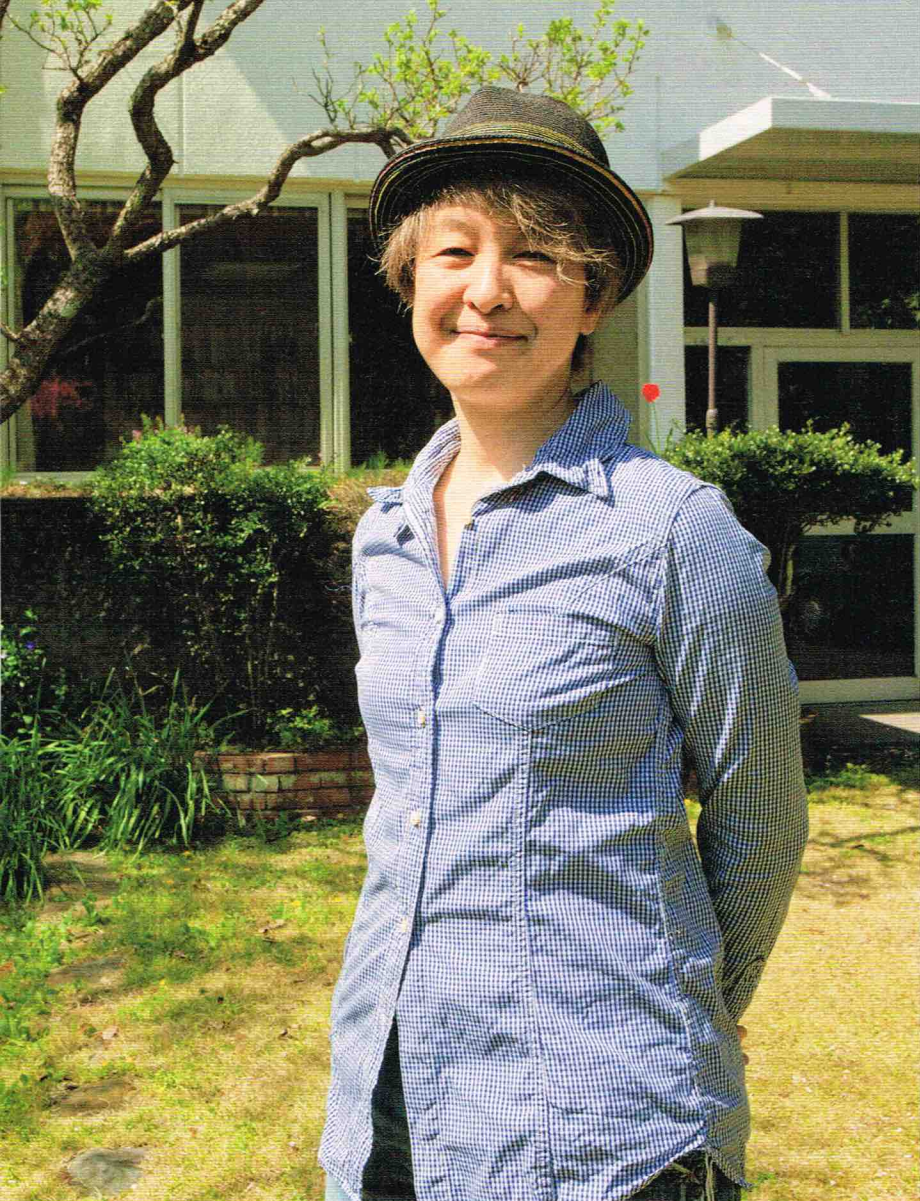
「ヨーロッパではクラブチームが優勝すると、町の大きな広場に集まってお祭り騒ぎをするんです。日本でそういう広場の役割をしていたのは、昔は神社仏閣だったけれど、いまは人が多すぎて境内に入れない。だから、そのかわりがスタジアム。町の外じゃなくても、町の真ん中に、みんなが集まれるスタジアムをつくりたい」

スタジアムを中心に広がる町。そこには人が集まり、アジアの人々もいて、チームが勝てばお祭り騒ぎが始まる。クラブチームづくりの先に、岡田さんは次世代に残したい町の姿を見ている。

PROFILE

おかだ・たけし
1956年大阪府出身。早稲田大学、古河電工でディフェンダーとして活躍。Jリーグ発足時からコーチとして参加。ワールドカップ初出場の98年大会と2010年大会の日本代表監督。Jリーグではコンサドーレ札幌、横浜F・横浜マリノスを指揮。2012年に中国・杭州のプロサッカーチーム監督もつとめた。

*地球の資源、人口、軍備、経済、環境についての問題意識からヨーロッパの知識人が設立した団体。名称の由来は、1968年に初代会がローマで開かれたこと。1972年に地球の有限性を説いた『成長の限界』を発表し、話題を呼んだ。



【 TURNS な人々⑬ 】

プロジェクトエディター

紫牟田伸子

Shimuta Nobuko

シビックプライドのある町は
道ばたに立っているだけで
ステキなんです

文・佐藤恵菜 写真・山本大樹

この町で暮らしたい。その気持ちの根っこには、この町を誇りに思う気持ちがあるはず。『シビックプライド』という考え方に注目し、まちづくりに生かす。紫牟田伸子さんはその最前線で活躍するプロジェクトエディターだ。

聞き慣れない職業だが、もともとデザイン関係の本や企画に携わる編集者である。「福井市おいしいキッチンプロジェクト」など、地域の魅力発掘プロジェクトにか

かわる。住民自身による町本づく

く、まちづくり全体にかかわる仕事だった。そこで「シビックプライド」という言葉に出合う。

「郷土愛」では伝わらない
「あなた自身が、
この町である」ということ

家の前の路地に縁台が並べられ、近所の人がポツポツと集って、ビールを飲みながら世間話。

東京西部で育った紫牟田さんは、近所づきあいはどちらかというと苦手だった。ところが気がつくと、大家さんと呼ばれると3回に1回は顔を出すようになっていた。そのうち自分もお総菜を手に出ていくようになった。

「近所づきあいていいものだ」初めて意識する地域コミュニティの心地よさだった。

「いま思えば、あの下町のあったかさがシビックプライドだったんですね。私、ずっとここに住んでもいいなと思いましたが」

ちょうどそのころ、紫牟田さんは千葉県に新設された柏の葉キャンパス駅の駅前開発のプロモーションにかかわった。建物だけでなく、移民の増加も大きな要因だった。

町を自分の居場所だと思えなければ、町の秩序を守るとか、きれいにしようというモチベーションは生まれない。移民の多い郊外の町が荒れていた。

こうした問題を抱えた町の再開発計画のなかでシビックプライドが見なおされた。インフラや公共施設などハード面だけ整備しても町は再生しない。この町が好き、この町で働きたいと思えるシビックプライドを象徴できる町にしなければ。

たとえば、古くから移民を受け入れ、多様な価値観を許容する都市として知られていたオランダのアムステルダムは、新しい魅力を発掘し発信する「amsterdam」というキャンペーンを開始した（左下写真参照）。行政、市民グループ、民間企業らが協働した、町を挙げての大キャンペーンである。赤と白のシンプルなロゴが町のあちこちで目を引き、グッズを市民が手にする。都市整備計画やその進捗状況は、市庁舎をはじめ公共空間において公開された。「amsterdam」と口にする人だれもが、アムステルダムの住民であることを誇りに思い、自分がアムステルダムの一部であると自覚すること。それがキャンペーンのねらいだ。

こうしたシビックプライドをはぐくむ取り組みがマンチェスターやバルセロナなど欧米の諸都市で始まっている。

自分のやりたいことを町のこととして考えることができるか？

日本ではどうか。まちづくりとシビックプライドの関係はどう考えたらいだろうか？ 紫牟田さんは、住民自身が自分のやりたいことをやることから始まると思う。

「それを町のこととして考えられるか？ だと思えます。町のためになるかという視点をもてるかどうか。それがシビックプライドの出発点です。」

まちづくり計画でよく見られる失敗例のひとつが、住民自身の経験や実感をともなわれない、受け売りの夢を語ってしまうもの。自分



「amsterdam」のキャンペーンロゴがデザインされた広場。
出典／『シビックプライド』（下参照）

のやりたいことにもとづいてないから、ほかの地域で評価されたものや成功例を安易に導入してしまう。だからどこも似たようなショッピングモールや遊園地ばかりになってしまったんじゃないでしょうか。

たとえば農業をやりたいと思っただけで町のためにという視点をもったときに、なにができるかと考える。直販だけでなく、小さくても農業フェスティバルを開けるかもしれない。フェスティバルには、たくさんの人に来てほしいですね。するとポスターをつくらう、いい写真を撮らうと思うし、いいキャッチフレーズを考えようと思うでしょう。会場をきれいに掃除しようと思うでしょう。これが大事なことだと思います。外の人に来てもらいたいと思うことではじめて人は客観的になれる。自分の町を客観的に見ることは、じつはすごくむずかしい。私も生まれ育った町を客観的に見たことってないです。でもシビックプライドをはぐくむのは客観的な目だと思う。」

シビックプライドのある町に人は集まる

シビックプライドのある町とは、どんな町だろうか？

「なんとなく雰囲気がいいんですよ。外から来るとわかる。排他的でないんですね。よそ者を受け入れる雰囲気とシビックプライドは密接な関係があると思いますよ。」

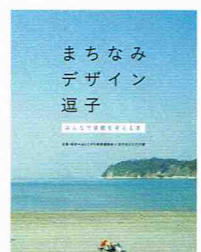
多様な人を受け入れる度量の広い町はよそ者を惹きつける。よそ者は、よそ者ならではの客観的な視点で町を見る。そこで町のよさⅡシビックプライドを感じれば喜んで移住する。そうやって入ってきたよそ者の「この町が好き」という気持ちは自然とまわりに伝播する。だから多様性のある町ほどいいムードが流れるというのだ。

また、シビックプライドのある町は公共空間を見ればわかると思う。それは単に公民館が立派だとか、ゴミが落ちていないといったことではない。

「公共の場にいる人の姿がステキな風景になっている。たとえば道を歩く人、橋を渡るカップル、図書館の前でおしゃべりしている人なんの変哲もない日常が絵になるのがステキな町なんだと思います。」

右ページの写真は、鎌倉の紫牟田さんの自宅前で撮影したもの。

紫牟田さんは十年前に東京の上野から神奈川県鎌倉へ引っ越してきた。上野の二軒長屋時代のような下町コミュニティはないけれど、昔の風情を残した町なみ、それを



紫牟田さんがプロジェクトエディターとして関わった冊子。

守ろうとする住民の気風が心地よいと話す。それがいまの紫牟田さんの鎌倉へのシビックプライドだ。「シビックプライドは個人のなかにつくられる町との関係ですね。行政がつくるものでも、住民に与えるものではない。漢方薬のように、じんわりと沁みってくるものじゃないかしら」

ひとりひとりの心のなかに生まれるシビックプライド。それを地域の人たちと共有し、広げていこうとする取り組みが、歩いているだけでステキな町につながっていくのかもしれない。



『シビックプライド』
海外のシビックプライド・キャンペーンの事例を解説。
宣伝会議／1900円（税別）
現在、日本の事例をまとめた続編を準備中。

PROFILE

しむた・のぶこ
1962年東京都生まれ。『デザインの現場』、『BT／美術手帖』（美術出版社）の副編集長を経て、日本デザインセンターで商品企画などに携わる。2005年「シビックプライド研究会」を発足。地域のまちづくりの企画、編集で活躍中。近著に『編集学：つなげる思考・発見の技法』（幻冬舎）。